和辻哲郎における「個性」の意義について

荒木夏乃*

はじめに

和辻哲郎（一八八九―一九六〇）は、人間関係を前提とした「間柄」の倫理学を打ち立てた人物として名高い。彼は、人間の「個性」を、あくまでも人と人との関係において語る。従って、彼の思想に対する否定的な評価には、「個の問題の追究が弱い」というものがある。和辻が死亡した一九六〇年頃は、その一点によって、彼の業績すら否定しようとする者も少なくなかった。[1] しかし近年では、和辻倫理学は改めて注目されており、その限界や挫折という負の側面も含めて、積極的に見直されつつある。

さて、和辻における「個人」性に注目した人物として、飯嶋裕治を挙げる。彼は和辻における「個人」的存在を、「個々人において諸資格が特異な仕方で複合しており、それがまさに「その人らしさ」を形づくっている」点に見出したが、同時に「資格（面・ペルソナ）に規定されつつなされる日常的諸行為は、それが熟練し卓越したものになればなるほど、その資格自体に独自の表情を与えるものとなり、この一連の過程を通じて、資格は個々人に固有の徳として実現され獲得されていく」と指摘した。[2] これは、「個人」が自身の固有の本性を、自らの行為によって形成していく点を解説しており、和辻倫理学における「個人」の可能性を認めたものである。

「個人」的存在の「その人らしさ」に、自ら積んでいく経験を見いだした点は、大変意義深い。特に、「固有の徳」という言葉には、何よりの個性が表れていよう。しかし、人間にはもっと明白に、固有のものがあるのではないだろうか。それぞれの「肉体」である。「肉体」は、和辻が「個性」を論じる際に大変注目した要素でありながら、これまであまり関連付けて論じられてはこなかった。田中健夫は、身体が和辻の個人に関する思想において独自の役割を果たしていると指摘した。彼は和辻を「身体（肉体）の被規定性、主体性の内特に間柄によるそれだけに注目している」とし、それに対する批判があるとしつつも、やはり「身体（肉体）が外界から独立して存在する」という考えは無意味である、と述べた。[3] つまり田中は、和辻の肉体論に注目し、それが彼の「個人」観を読み解く重要な要素であると気付いていたにも関わらず、そこから両者の関係を掘り下げることをしなかったのである。

そこで本論では、「個」の問題の追究が弱いとされている和辻倫理学を見直すべく、和辻の「個性」に対する見解を年代順に辿った。使用する主な著作は、『自己の肯定と否定と』、『偶像再興』、そして『倫理学』である。これらにより、和辻が一貫して「個性」に対し肯定的な姿勢をとっていたこと、更にはそこに「肉体」が占める要素が重大であった点を指摘したい。

第一章「個性」の成立と完成

「個性」に対する和辻の思想を考察する為、第一に、「自己の肯定と否定と」という小篇を取り上げる。これは、和辻が二十五歳という若さで執筆した作品だが、既にその思想の確立が見られるものである。和辻は「自己否定」について、「自分を自己肯定の本道に導いてくれそう」な要求だと考えている。[4] 彼は自身のこれまでを振り返り、「無批評に自分の尊貴を許す」ことによって「独我主義の思想を体現」してしまったと反省した。当時の彼は、他者に対する同情や理解が欠乏し、孤立を誇りとしていたらしい。「人を愛する心持ちがどんなに強く自分の内に起って来ようとも、それを自愛まで持って行かなければ満足が出来なかった」[5] と述べている。

和辻は、このような自分を「真実の自己の殻」と見なし、「真実の自己」を深く強く伸びさせ、「孤立しようとする自己」を捨てる必要があると考えた。「真実に自己肯定をやるためには、まず自己否定がなければならぬ」[6] と気付いたのである。ただし、「肯定と否定との場合に「自己」の意味が違う」としている為、この点を確認する。

まず「真実の自己」について、和辻は「様々な本能から成り立っている」とした。

〔キーワード〕和辻哲郎／個性／男女／肉体／間柄

＊平成二四年度生　比較社会文化学専攻

しかしその「本能の数」は確定できないとして、「意識的に分析する事の出来ないもの」と考えている。彼は、これらの多様な本能が統一されたところに個性を見いだした。従って個性もまた、明確に認識できるものではない。

さて、和辻はここで、個性を人相に譬えている。「一、二の特徴を捕えることは出来るが、微妙な線や表情になると到底詳しく説明することは出来ない。しかも詳しく見れば見るほど他とは異なっている。[7]」この場合の人相とは、個々別々な特殊な人相を指しているため、一般的な「顔」ではない。

和辻は、人相と顔の関係を、個性と人間の関係に重ねて考える。つまり、我々が人相のない顔を思い描けないこと、そして同時に、どれだけ特殊な人相でも、「顔」である（「顔」の一部ではなく全部である）ことと同様に、個性がなくては人間もなく、特異な個性でも、全体（ガンツエス）としての人間と見なすのである。だからこそ彼は、「意味価値のあるのは常に個性であるが、人間としてでなければそれは意義がない[8]」とするのである。「人間」は、ある存在の全体性を指すが、顔や人相には見る・見られる関係が想定されている。つまり彼の言う「個性」も、他者との連関が前提にあると言えよう。

また、和辻は次のようにも考えた。「個性を完成することはわれわれの生活の内にひそむ目的である。個性が完成せらるる度の強ければ強いほどそれは特殊の色彩を強めるのであるけれども、同時にまた人性の進化に参与する所も深くなる。特殊の極限はやがて普通となるのである。[9]」つまり、個性は他者との連関そのものを意味する為、特殊になればなるほど、「人間」としての働きも強くなるというのである。ここで確認したいのは、「個性の完成、自己の実現」が、我に執する所で行われるのではない、という点である。つまり和辻は、「無批評に自分の尊貴を許す」という「自己肯定」ではなく、「我を滅すること」という「自己否定」によって個性を完成させようとしたのである。

> 自分にはまだすべての人の内の「人間」を愛するだけの力がない。（中略）それ故に自分は醜くまた弱い自分を絶えず眼の前に見ている。自分の我を以て常に人の弱所を突こうとしている卑しい自分を絶えず見まもっている。後悔が鋭く胸を刺すことも稀ではない。（中略）悔いなきことを誇りとしたのは、もう過ぎ去った事である。やがてまた悔ゆることなき生活に入りたいという要求はあるが、それにはまず我を滅して大いなる愛の力に動く所の自分になっていなくてはならぬ。真に自分の個性の建立に努むる途上においてならば、いかなる事が起ろうとも自分は悔いない。[10]

ここまでで確認できるのは、和辻が滅すべきと考えているのはあくまでも「我」であって、「個性」ではないという点である。彼は、「個性」を発揮する状態を決して疎んじてはいなかった。それは、次の文章にも表れている。

> 自分はすべての人と妥協した平和な状態を望んでいるのではない。個性は最高の権威を持ち、争闘は人性の根本に横たわっている。しかし人々が皆我を滅して、しみじみした涙を流し、お互いに「人間」として心と心とを触れ合わせるというような状態になると、個性はその特殊を厳密に保持しながら相互に融け合い、争闘は我の偏狭を脱して人性進化のために愛の光の内に行われる。偉大なる者への屈従は歓喜を以て迎えられ、弱小を征服することは大いなる愛の力を以てせられる。ここに偉大なる者の偉大なるゆえんは最も明らかにせられる。そうして弱小なる者の生活が人性の上に持っている意義もまた明瞭になる。[11]

以上から、この小篇においては、「否定すべき自己（真実の自分の殻）」は「我」であり、「肯定されるべき自己（真実の自己、人間そのもの、愛の力のもとに動くもの）」は「個性」と想定されていることが判明した。だからこそ、「自己否定」の要求は「自分の個性の建立、自己の完成の道途の上に、正しい方向を与えてくれる[12]」という結論になるのである。「個性」は「我」を滅した状態を指すため、人間（関係性の中での存在）という意味を既に備えている。故に和辻は、「個性」を保持すべき大切なものと考え、その完成を、「生活の内にひそむ目的」とまで断言していたのである。当時の和辻が、「自己否定」を通じて「個性」を成立させるまでにどれほど苦しんだか、そしてその後、完成に向けて途方もない道のりを感じていたかが分かるだろう。

第二章「個性」の完成に向けての過程、及びその保持

次に、『偶像再興』を取り上げる。全集第十七巻に収録された本作の、「版を新たにするに当たりて」によると、執筆されたのは大正五年から七年にかけてである。当時の和辻は、ニイチェやキェルケゴールの研究に没頭していたため、この著作にもその影響が表れているという。加えて、時代の気分や彼自身の年ごろの関係から、「自己

の主観的な体験をむやみに重大視し、それがあたかも人生の中枢問題であるかのごとくにふるまっている」[13]という反省を述べている。従来の和辻論では、『偶像再興』に思想的変化を認めることが前提となっていた。[14]しかし、この「版を新たにするに当たりて」の同所で、和辻自身は「自己中心的な関心の中にも、対象に即する思惟への傾向は幽かに現われている」と振り返っている。[15]後の思想の片鱗が見えている、と著者自身が認識している点は大変興味深い。和辻に即して考えるのならば、その思想の連続性が、どういった箇所で現れるのかを検討する必要があるだろう。

さて、『偶像再興』の中でも、「衆愚」という章には、和辻哲郎の「個性」に対する姿勢が強く見られる。この章で彼は、周りの人間に対する自身の気持ちが二種類あるとしている。[16]一つは、「汗で地を霑おす日にやけた人々」へのもので、友人として親切に交わることができるとする。しかし「教育ある俗衆」に対しては、「真の道徳を蹂躙して形式の道徳を振りかざす」「自己と生とに対する誠実の真義を解せずして、人から奴隷的誠実を要求する」などと批判をするのである。彼はこのような心の持ち方を、山腹にある者が頂上を見上げるとともに、山麓を見おろすようなものだとして、矛盾なく捉えている。詳細は以下の通りである。

> すなわち偉人を尊崇する心（上への距離の感情）と俗衆を侮蔑する心（下への距離の感情）とは、同一の立場の両面である。この場合、謙抑と傲慢とは手を携えて個性の生育を促進する。謙抑は内より個性を刺激し、傲慢は外に対して個性の腐蝕を防ぐ。なぜなら、偉人は人間の内から、その本質たる最も個性的なものを引き出し、俗衆は個性の権威を蹂みにじって、人間を平らかに同型化しようとするからである。[17]

ここでいう「謙抑」と「傲慢」は、それぞれ「偉人を尊崇する心（上への距離の感情）」と、「俗衆を侮蔑する心（下への距離の感情）」を言い換えたものであろう。これらを、和辻はそれぞれの仕方で「個性の生育を促進する」ものと捉えているのである。「個性」が、他者への感情によって生育されるという主張は、言い換えれば、「個性」は人間関係の中で発揮され、常に他者に対し開かれたものである、ということであろう。これは、前章で検討した「自己の肯定と否定と」での主張に等しい。

また、彼はこのような俗衆による統治が、青年の腐敗を招き、人類の文化にとって危険である、とも指摘する。[18]この危機に対し、和辻は「個性の権威のために衆愚と戦うことは、我々の任務でありまた誇りであらねばならぬ」と述べる。[19]ではその戦いとは、何を指すのか。彼は「個性の発揚完成の努力」そのものが、衆愚との戦いに他ならないとする。[20]己の「個性」を極め、その完成を目指していくことが、衆愚との戦いそのものなのである。つまり、当時の彼にとって「個性」は未だ完成しきってはいないものであると同時に、その完成が目指されるべきものであったと考えられる。これも前章で扱った「自己の肯定と否定と」における「個性」の理解に等しいだろう。

以上のように、和辻は衆愚に対する自身の「傲慢」な心を正当化している。彼らに対する気持ちは、和辻にとって、心苦しくも譲れないものであったらしい。以下の記述を参照する。「私は衆愚もまた悩みある人間だということを知っている。彼らの傾向を憎むほど個々の人間を憎みはしない。しかし私の愛はなおはるかに彼らを抱擁するにはたりない。生に対する彼らの不誠実を呪う心は、絶えず私の内に脈を搏っている。彼らに対する攻撃は、私の彼らに対する愛の頂上である。[21]」

ここで彼は、愛という言葉によって、他者に対する負の感情を表現している。衆愚を抱擁するには愛がたりない、としながらも、彼らへの攻撃を「愛の頂上」と述べている点は一見不可解である。しかしこの疑問の解決にも、前述の「自己の肯定と否定と」が参考になるだろう。「我を滅し得ず、愛の力の足りないという悔いは、我を滅して大いなる愛の力に動くことの準備である。[22]」つまり、衆愚に対する和辻の攻撃は、我を滅し得ないからこそ起こった愛の不足であり、のちに我を滅して大いなる愛に動くための過程に他ならないのである。彼がここで己の衆愚に対する攻撃を正当化できたのは、いつか彼らを愛で抱擁しきれるほどに、我を滅すること、即ち「個性」を発揮することを目指していたから、と考えられるのである。

これらから、『偶像再興』を執筆した当時の和辻は、「個性」について、基本的には「自己の肯定と否定と」と同じ姿勢を見せていると言えるだろう。即ち、「個性」とは尊重されるべきものであり、成立と同時に人間関係を内包するものである、という見解である。加えて、『偶像再興』では、「個性」とは、他者への感情によって生育されるものである、という考えが提示された。つまり、「自己の肯定と否定と」では不透明だった、「個性」の完成までの過程が説明されたのである。さらに、「個性」の権威のために衆愚と戦うことが、任務であり誇りでもあるとし、その戦い方も、ただ「個性の発揚完成の努力」にのみ認めている。つまり、「個性」の保持にも言及した著作であるといえよう。『偶像再興』での和辻は、いまだに「我」を滅しきれていない自己を自覚しつつ、いつかは「我」を滅して、大いなる愛の力で動けるようになるだろ

うという希望を抱いている。例えその時に抱く他者への感情が、負のものであったとしても、人間関係の中で生きている以上、当然起こる現象だと割り切って考えるのである。よって、本作での「個性」の捉えられ方は、「個性」の完成までの過程に、より一層人間関係を見込んだものであると言えるだろう。

第三章　目に見える「個性」

第一節　間柄の倫理学

これまでの検討から、和辻の「個性」が、「我」とは異なり人間関係を内包するものであることが分かった。しかし、これでは従来の和辻批判と同様に、その「個」が間柄的に説明されるだけである。そこで、和辻の主著である『倫理学』を用いて、間柄について検証していくことにする。

和辻は『倫理学』において、次のように述べた。「倫理問題の場所は孤立的個人の意識にではなくしてまさに人と人との間柄にある。だから倫理学は人間の学なのである。人と人との間柄の問題としてでなくては行為の善悪も義務も責任も徳も真に解くことができない。[23]」人と人との間柄の問題、という言葉からは、ただちに「人間」という単語が連想されるだろう。これは元来「よのなか」「世間」という意味であったものが、いつしか個体的な「人」の意味に転用されるようになったものである。このため人間という言葉は、「「世の中」であるとともにその世の中における「人」である。（中略）単なる「人」ではないとともにまた単なる「社会」でもない。[24]」と和辻は指摘する。このような「世の中」としての性格を、「人間の世間性あるいは社会性」とし、「人」としての性格は「人間の個人性」と表した。[25]

次に「存在」という言葉を確認する。[26]これは、和辻が『倫理学』において、「人間存在」という語を多用するためである。まず「存」だが、これは本来「主体的な自己保持」という意義を持っている。つまり己が己自身を持つこと、といえる。また、この漢字は、「忘失に対する把持、亡失に対する生存」と見なされるため、あらゆる瞬間に「亡」に転じうるという、人間存在の時間的性格を表すものといえる。一方、「在」は「主体がある場所にいる」ということが本来の意義である。つまり「去」に対する言葉である。このとき和辻は、主体がいる場所について、宿、宅、郷、世などの社会的な場所を想定しているが、これは即ち、家族、村、世間などの人間関係を指す。よって「在」は、「主体的に行動する者が何らかの人間関係のなかを去来しつつその関係においてあること」を意味する。[27]従って「存在」とは、「間柄としての主体の自己把持、すなわち「人間」が己れ自身を有つこと」である。[28]

以上から「人間存在」という言葉が、社会性と個人性という二重の性格を持ち、常に人間関係の中で生きながら己れ自身を持つ、という意味を有すると分かるだろう。

また、和辻はそのような人間存在の根本構造を「否定的構造」と表現する。和辻において、「否定」とは、他者との連関の様子を表す言葉である。

> 個人の独立性は全体者に背くところにあり、全体者の全体性は個人の独立を否定するところにある。従って個人とは、全体者が成り立つためにその個別性を否定せらるべきものにほかならず、全体者とは個人が成り立つためにそこから背き出るべき地盤である。他者との連関において存在するということは、他者を否定するとともに他者から否定せられることにおいて存在するということにほかならない。人間の間柄的存在とはかかる相互否定において個人と社会とを成り立たしむる存在なのである。（中略）一を見いだした時、それはすでに他を否定し、また他からの否定を受けたものとして、立っている。だから先なるものはただこの否定のみであると言ってよい。しかしその否定は常に個人と社会との成立において見られるのであって、両者を離れたものではない。いわばこの否定その者が個人及び社会として己れを現わしてくるのである。すでに個人と社会とが成立している限りにおいては、社会は個人の間の関係であり、個人は社会における個人である。（中略）根源的にはこれらの両面はすべて否定において成り立っている。[29]

上記の、人間の根源否定性を、和辻は「絶対的否定性」や「己れの本源たる空」等と表し、[30]人間はこの「根源的なる空」と、その否定的展開である「個人存在」及び「社会存在」という三つの契機を「否定の運動として動的に統一」していると定義する。このように、常に人と人との関係において否定の運動をし続けているのが、和辻哲郎の定義する「人間存在」である。では、そのような様態と運動を行う人間存在の「個性」は、『倫理学』においてどのように論じられているのだろうか。本書で特に「個性」が取り上げられるのは、「恋愛」に関する箇所である。

第二節「恋愛」における「個性」

和辻の恋愛論において「個性」が言及されるのは、人間存在の性の愛が、性衝動から出発するのではない、という議論においてである。和辻は、「日常現実における性関係は、初めより人格や愛の契機を含み、身心の統一において男女が互いに相手の全体を取り、自己の全体を与えんとするもの」であるとし、「身心分離の立場に立って、身体の側に性衝動を、心霊の側に愛を認めようとするごときは、抽象的思惟の作為に過ぎない」と断ずる。[31] 特に彼は、肉体の有する「形」が、人間にとって無限に深い意義を有すると主張したのである。彼にとって、愛するものの「顔」は単なる肉体などではなく、相手の人格や心霊、情緒、そして個性があるものである。相手の頼もしさや優しさは顔に現れ、「相手が他の何人によっても置き換えられ得ぬ唯一回的な存在であるとすれば、その唯一性もまた顔にある」[32]という。このように、顔を精神の座と認めると同時に、和辻は、顔が肉体の一部であることにも言及する。顔と同様に、指紋も、身体の全体に至るまでが、唯一回的であるという。そして、全身もまた情緒を現わし得ることから、和辻は肉体全体を精神の座と考えた。この肉体は、精神の座でありながら、肉体であることもやめないという。そしてこれが、和辻にとっては、男女関係において欠くことのできない重大な契機なのである。

> 男性にとっては女体の「形」が無限の魅力を有し、女性にとっては男体の「形」が無限の引力を有する。形そのものが直接に引くのであって、いわゆる性的衝動のごときがその背後にあるのではない。むしろ逆に形が性的衝動を誘引する場合はあるであろう。してみれば、男体女体の「形」の意義は性別による牽引に存するのであり、そうしてその性別は、人間存在における根源的な差別なのである。（中略）性的関係における男女は、それぞれその肉体においてかかる「形」を有してはいるが、その形は同時に唯一回的な個性の表現であり、またこの人格の生の表現なのである。従って性別による牽引はここでは一定の個性的な男女の間の関係になる。これは一面においては「男性」と「女性」との対立、対立する性の間の相互牽引でありつつ、他面においては互いに代換し得られぬ個性的なるものの対立的合一である。これが通例「恋愛」と呼ばれるものにほかならない。[33]

「恋愛」を個性の対立的合一と見なす和辻は、男女が互いに特定の異性の相手を求める、という点に強い興味を抱いている。

> 身心ともに個性的であり、そうしてこの個性的な身心をもって性的に関係しようとする者が、相手と己れとの適応性を無視するということはあり得ない。いわんやこの選択が、好き嫌いの感情として直接に異性への牽引と反撥とを決定する以上、性的関係の特殊的限定は避けることができないのである。そうしてこの特殊的限定が「恋愛」を、すなわち性的なる愛を成り立たしめるのである。[34]

これは、和辻がまさしく個性を、ある人間存在を特定の人物にさせるための重要な要素と考えていたことを示す。そしてその個性の中に、「肉体」の形を含んでいたことは注目に値するだろう。前述の「自己の肯定と否定と」や『偶像再興』における「個性」の論には、「肉体」に対する言及はなかった。しかし、和辻はそれらよりはるかに昔から、「肉体」を意識してはいたのである。一九〇七年、和辻が十八歳のときに執筆した小篇、「霊的本能主義」には以下のようにある。

> 肉体！　肉体の存在が何である。物質の執着は霊の権威を無視し肉の欲の前に卑しき屈従をなす。米と肉と野菜とで養う肉体はこの尊ぶべき心霊を欠く時一疋の豕に過ぎない、野を行く牛の兄弟である。塵よりいでて塵に返る有限の人の身に光明に充つる霊を宿し、肉と霊との円満なる調和を見る時羽なき二足獣は、威厳ある「人」に進化する。肉は袋であり霊は珠玉である。袋が水に投げらるる時は珠もともに沈まねばならぬ。されど袋が土に汚れ岩に破らるるとも珠玉は依然として輝く、この光が尊いのである。[35]

肉と霊が円満に調和したものが「人」である、との考えは、「肉体」を人間の構成要素として重視しているといえよう。しかし、この時点の和辻は、心霊と肉体に、珠玉と袋という役割を課し、重要度に優劣をつけている。心霊が『倫理学』での「精神」を指すとすれば、和辻は時を経て、肉体と精神の重要性に差をつけなくなったのではないだろうか。また、「霊的本能主義」では「袋」とされていた「肉体」は、『倫理学』においては「精神の座」と表現されているが、同時に、肉体の形そのものが無限の魅力、引力を有するものとしても取り上げられている。これは、『倫理学』で、肉体が果たす役割が大きくなったということである。相手の人格や心霊、情緒、そして個性を、肉体の「形」に見出したことからは、[36] 個性が肉体の価値を高めた要因であると言えるのである。唯一回的、という表現は、まさにひとりひとりの固有の特徴が「肉体」

であることを、和辻自身が自覚していたことを示している。

この「肉体」について、初めて『倫理学』で言及されるのは、第一章第二節「人間存在における個人的契機」においてである。和辻は、「個々の人」について考える為に「個々の肉体」に注目した。そして、「肉体」を、主体的かつ他の「肉体」とつながりを持つもの、と考えたのである。従って、「肉体」が個別的独立性を得るためには、あらゆる間柄から背反し、その資格を破壊しなくてならないとした。資格が破壊される状況は二つある。一つは、「肉体」がもはや人でない単なる物体、間柄を作り得ない物体に転ずる場合であり、もう一つは、「肉体」が「身心脱落」と表現できるほど絶対的に従属的な、空になった場合である。このような事態が起らない限り、つまり間柄を作り得る限り、和辻にとって「肉体」は他とつながったものである。[37]

なお、ここで破壊される資格には、男性として女性に引かれるという資格さえも含まれるという。このような言及からは、和辻が、恋愛において異性に惹かれる時点で、「肉体」は個別的独立性を失っている、と見なしていたことが窺える。つまり和辻は、人間が間柄的存在であるからこそ、その個別的独立性が失われていると考えたのである。「自己の肯定と否定と」における「我」は、間柄的存在であるがゆえに滅すべきものであった。よって、和辻が個別的独立性と「我」に関連性を見いだしていた可能性はあるだろう。あえて言えば、個別的独立性への妄信が「我」であったのではないだろうか。自らを「個別的独立性」だけの存在と思い込まず、「個性」の発揮を目指していく。和辻の「個性」に対する肯定的な見方は、青年期から一貫していたと言える。

おわりに

本論は、和辻の「個性」に対する思想を、主に「自己の肯定と否定と」『偶像再興』『倫理学』から探ってきた。まず「自己の肯定と否定と」では、「我」と「個性」は別物とされた。「我」を滅し他者に対して開かれた存在になることで、「個性」は発揮される。この「個性」を完成させることが、生活の内にひそむ目的とまで考えられた。

次に『偶像再興』では、「個性の生育」は、他者への感情によってなされるとされた。「個性」は人間関係の中で発揮される、という思想は変わらずに、その生育過程を詳説した形である。さらに、「個性」の権威のために衆愚と戦うことを任務・誇りとし、その戦い方もただ「個性の発揚完成の努力」にのみ認めている。このことからは、当時の和辻が「個性」の保持にも関心を抱いていたことが分かる。

最後に『倫理学』だが、このとき和辻は、「個性」の完成について言及しない。ただ「人間存在」については、社会性と個人性という二重の性格を持ち、常に人間関係の中で生きながら、己れ自身をも持つもの、という間柄的存在の定義をし、更に、人と人との関係において否定の運動をし続けると言うのである。これは、少なくとも「自己の肯定と否定と」で言うところの「我」を捨てていることが前提になっているといえよう。つまり和辻は、人間存在について、既に「我」を滅し、「個性」の建立に向けての出発が出来ている、と考えていたのである。この著作は、前の二つとは異なり、「個性」の議論に「肉体」が登場したという特徴があった。

『倫理学』での「個性」が完成形なのか、成熟過程なのかは定かではない。だが、「肉体」の形に「個性」を認めた以上、それが完成することは生涯ない可能性も考えられるだろう。何故なら人間は成長し、やがて老いていくからである。肉体的に続くこのような「個性」の変化を、和辻はどう捉えていたのだろうか。『偶像再興』に見られるような「個性」の生育、保持を踏まえると、彼は「個性」が完成しないことを悲しみはしなかっただろう。発展途上と考えて焦ることもなく、ただ道の途中と捉えて見守っていく姿勢が、『倫理学』執筆当時の和辻には出来ていたように考えられる。未完成であっても、ひとりひとりの「個性」を重んじ、特に「肉体」ごと惹かれ合う、代替の利かない唯一性を発揮する人間関係として、「恋愛」に注目していた点は重要である。恋愛は、男女という最も小さな共同体の結ぶ関係性である。[38] その最小単位の共同体で、「肉体」ごと、という最も強大な「個性」の対立的合一がなされた。「個性」を重視した和辻にとって、この共同体が特別な価値を持っていても不思議ではないだろう。彼の男女観における「個性」の役割は、今後も検討していく必要がある。

和辻哲郎のいう「個性」が、間柄的関係を前提とすることは以上の通りである。従って、この点を以て「個の問題の追及が甘い」と批判されることは確かにあるだろう。しかし、彼の定義する「人間存在」は、常に主体的で、運動をし続けている。「肉体」が個性である以上、その変化は終わることがないであろう。未完成な「個性」を発揮し続ける人間が、己の「個性」を完成させるためにできることは、ただその「個性」を発揮し続けることのみである。これはまさに、人が己の力で自分自身を変えていく過程と考えることができるだろう。学び、変化しようとする自己修養ともいうべき姿勢を肯定している点、そしてひとりひとりの固有の肉体、そのすべての瞬間に、唯一性という個性の発揮を見いだし得たことからも、彼の思想は個の追究の展望を確かに含んでいると言える。

注

(1) 佐藤康邦「序文」(佐藤康邦、清水正之、田中久文編『甦る和辻哲郎　人文科学の再生に向けて』「叢書　倫理学のフロンティア」V、ナカニシヤ出版、一九九九年、i—ii頁)。ここでいう「業績」には、「ニーチェ、キルケゴール等のいわゆる実存主義哲学の驚異的に早い段階での紹介者」である、というものすら含まれる。

(2) 飯嶋裕治「和辻哲郎の解釈学的行為論に見る「個人」的存在の可能性—「資格」と「徳」を手がかりに—」『思想』第一〇六一号、岩波書店、二〇一二年、五四頁。

(3) 田中健夫「和辻倫理学における国家と個人」『千葉大学教育学部研究紀要Ⅱ　人文・社会科学編』第四五巻、千葉大学教育学部、一九九七年、四五頁。なお、田中は「身体」と「肉体」という語を混用するが、本論では和辻が「身体」と記述する箇所以外は「肉体」と記す。

(4) 和辻哲郎「自己の肯定と否定と」(『和辻哲郎全集』第二十一巻、岩波書店、一九九一年)七三頁。以下、和辻に依拠した傍点(、)と、筆者傍点(・)がある。

(5) 前掲「自己の肯定と否定と」七四頁。

(6) 前掲「自己の肯定と否定と」七五頁。

(7) 前掲「自己の肯定と否定と」七六頁。

(8) 前掲「自己の肯定と否定と」七六頁。

(9) 前掲「自己の肯定と否定と」七六頁。

(10) 前掲「自己の肯定と否定と」七七—七八頁。

(11) 前掲「自己の肯定と否定と」七九頁。なお、ここでの「偉大なる者」「弱小なる者」がそれぞれ何を指すのかは、説明がないため不明である。

(12) 前掲「自己の肯定と否定と」七九頁。

(13) 和辻哲郎『偶像再興』(『和辻哲郎全集』第十七巻、岩波書店、一九六三年)三頁。「版を新たにするに当たりて」は、昭和十二年に書かれた箇所である。

(14) 宮川敬之『和辻哲郎—人格から間柄へ』講談社、二〇〇八年、二六一頁。

(15) 和辻は『偶像再興』の結末部が、『古寺巡礼』に直ちに結びつくとしている。『古寺巡礼』は、和辻が大正七年(二十九歳)の時、奈良へ古寺を巡る旅をした際の印象記である。

(16) 前掲『偶像再興』一三四—一三五頁。

(17) 前掲『偶像再興』一三五頁。

(18) 前掲『偶像再興』一三六頁。和辻は、この主張をしたニイチェやプラトオンに同意している。

(19) 前掲『偶像再興』一三六頁。

(20) 前掲『偶像再興』一三六頁。和辻は、野獣と戦わず、生活の内に自己の精神王国の建設を目指したプラトオンや、言葉でのみ俗衆と戦ったイエス・キリスト、その他ニイチェやトルストイを例に挙げ、個性の発揚完成の努力こそが衆愚との戦いである、という結論に至っている。

(21) 前掲『偶像再興』一三七頁。

(22) 前掲「自己の肯定と否定と」七九頁。

(23) 和辻哲郎『倫理学』上(『和辻哲郎全集』第十巻、岩波書店、一九六二年)一二頁。

(24) 前掲『倫理学』一七頁。

(25) 前掲『倫理学』二二頁。

(26) 前掲『倫理学』二四—二五頁。

(27) 前掲『倫理学』二四頁。なお和辻は「物がある場所にある」という現象を、「人間がその物を場所的に限定して有つことに過ぎない」と考える(同書二四—二五頁)。

(28) 前掲『倫理学』二五頁。

(29) 前掲『倫理学』一〇六—一〇七頁。

(30) 前掲『倫理学』一二四頁。

(31) 前掲『倫理学』三四六—三四七頁。

(32) 前掲『倫理学』三四七頁。

(33) 前掲『倫理学』三四八頁。

(34) 前掲『倫理学』三四九頁。

(35) 和辻哲郎「霊的本能主義」(『和辻哲郎全集』第二十巻(増補改版)、岩波書店、一九九一年)二四—二五頁。

(36) 根来司は、和辻が『偶像再興』の翌年に刊行した『古寺巡礼』(旧版)において、仏像の人体美を「肉」という語で多く表現したと指摘する(「肉の美しさ」「肉の美」など)。しかし改版ではこれらの語は書き改められている。根来は『古寺巡礼』の旧版が絶版された理由として、この漂いすぎた肉感を挙げ、書き換えの理由は「和辻もこれをはずかしく」感じたからではないかと推測する(根来司「『古寺巡礼』の旧版」姫路文学館編『開館記念特別展　和辻哲郎の世界』姫路文学館、一九九一年、四二頁)。

(37) 前掲『倫理学』七〇—七一頁。

(38) 和辻において「恋愛」は男女のものしか想定されていない。また和辻は、夫婦(二人共同体)と恋愛関係にある男女の違いを、婚姻という制度の有無にのみ認めていた(ともに恋愛をしている点では同質と考えていた)と考えられる。拙論「和辻哲郎における善悪観と男女観の関係—ヘーゲルの良心論を手掛かりに—」『道徳と教育』No.331、日本道徳教育学会、二〇一三年、所収参照。

The Value of Individuality in WATSUJI Tetsuro's Ethics

ARAKI Natsuno

Abstract

WATSUJI Tetsuro's Ethics is often pointed out that it is not enough to analyze Individuality. However, in recent years, we can see some works trying to find the importance of Individuality in WATSUJI's theory. The purpose of this study is an examination of Individuality by WATSUJI Tetsuro, and a grasp of this value in his ethics. By reading his works chronologically, we can find his changes and coherences. In conclusion, he consistently understood that Individuality is formed in the in-betweenness of person and person, and made a point of its preservation and completion. He stressed the importance of Individuality, especially in the theory of love in "Rinrigaku." He considered not only the spirit but also the Human Body as an Individuality, and paid attention to its irreplaceable oneness. The Individuality, which is contained in a Human Body is changing through a human being's life. In other words, Individuality will not be completed, and WATSUJI accepted this transformation. His ideas of Individuality is on the assumption from the theory of betweenness. However we can analyze the individuality in his ethics because he found that the only Individuality at Human Body that everyone has is unique and changes constantly.

Key words: WATSUJI Tetsuro/ Individuality/ Man and Woman/ Human Body/ Betweenness